慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Hawthorneの曖昧性 : "The Wives of the Dead"の場合
Sub Title	
Author	浅井, 静雄(Asai, Shizuo)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の教養学 : 慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008.) ,p.21- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88455348-00000012-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Hawthorne の曖昧性

―― “The Wives of the Dead” の場合――

浅井　静雄

H. J. Lang が注目すべき論文、“How Ambiguous Is Hawthorne?”(1)の中で、最初に論じた作品が、1831 年の *The Token* 誌に掲載された “The Wives of the Dead” である。

Michael J. Colacurcio は、この作品を “the minor masterpiece: brief, evocative, haunting, ambiguous, inexplicable”(2)と呼んだ。筆者もまたこの作品を “minor masterpiece” と呼ぶことに何の異存もない。“minor masterpiece” のあとに並ぶ五つの形容詞のうち、“evocative” と “haunting” は褒め言葉であろう。“brief” は作品の長さ、つまり形態を表すと同時に、その短い作品を “evocative” で “haunting” なものに仕上げた Hawthorne の技量に対する褒め言葉でもあると解することができる。問題は最後の二つの形容詞、“ambiguous” と “inexplicable” である。この作品のどこがなぜ曖昧で説明不能なのか、その曖昧さの曇りを払い、説明不能な点に矛盾のない解釈を加えることはできないのか、それによって Hawthorne の曖昧性の特徴に光を当てることができるのではないのか、それがこの小論の目的である。

Lang は、Hawthorne の曖昧性を三つに分類した。一つは言語表現に関するものである。例えば詩的な表現は曖昧であるがゆえに読者の想像力をかき立てるかもしれない。第二は読者に不審を抱かせるような不自然な登場人物の行動である。それも登場人物の内面と深く関わった不審な行動である。どのような動機でそのような行動を取るのか、作者による説明がないかぎり、その行動は曖昧なままとなる。そして第三が、Lang が “ambiguity of external action” と呼ぶものであり、ここで論じる “The Wives of the Dead” も、Lang によってその一例として論じられている。

作者が描く情景・登場人物・その行動、一見するかぎりどこにも曖昧な点はない。外面的（external）に見るかぎりどこにも矛盾はなく、自然に読み流してしまい何の疑問も起こらない。しかし一旦ちょっとしたことに疑問を覚えるとなると、そのごく自然に思われていたすべてがまったく別の様相を呈してくる場合がある。それが Lang の言う “ambiguity of external action” である。

実際、“The Wives of the Dead” はごくシンプルなストーリーで、表面的に

は何の曖昧性も感じさせない。一人は海で、一人は陸で生業をする兄弟が、それぞれ Mary と Margaret という女性と結婚し、経済的な理由から寝室二つの家に同居している。そしてその兄弟が、それぞれ海の嵐とフロンティアの紛争で亡くなったという知らせがその妻たち、義理の姉妹たちのもとにもたらされる。Mary は冷静な性格で、より感情的な Margaret のなだめ役となる。Margaret はベッドに入っても興奮して寝付けないでいると、近所の宿屋の主人が Margaret の夫の死は誤報であったと知らせにくる。喜んだ Margaret は喜びを伝えようと Mary の寝室に入るが、悲しみに疲れてすでに寝付いている Mary にとっては余計につらい知らせであることに気付き、起こさずに寝室に引き取って喜びに抱かれたまま寝入ってしまう。すると今度はドアをノックする音に気付いた Mary が出てみると、昔の求婚者がやはり Mary の夫の死は誤報であったと伝えてくれる。Mary もその知らせを伝えようと眠っている Margaret の寝室に入るが、やはり Margaret の気持ちを考えてためらう。そのような状況に続く、最後のパラグラフだけ原文を引用しておこう。

> Before retiring, she set down the lamp, and endeavored to arrange the bedclothes so that the chill air might not do harm to the feverish slumberer. But her hand trembled against Margaret's neck, a tear also fell upon her cheek, and she suddenly awoke.(3)

これが結末である。彼女が突然目覚めたあと、どのような場面が続いたかは読者の想像に任されている。お互いの夫の生存を喜びあう義理の姉妹の姿を想像する読者もいることであろう。実際多くの批評家や研究者がそのような読み方をしてきた。しかし Lang は、そのような読み方をするのは、Hawthorne の “ambiguity of external action” に気付かないせいだと言う。具体的に言えば、最後の “she suddenly awoke” の “she” は、頬に落ちた Mary の涙で目を覚ました Margaret ではなく、実はハッピーエンドを夢見ていた Mary の方だったというのだ。Mary が目覚めてこの物語が終われば、すべては夢だったことになり、夫たちの生存もまた夢に過ぎなかったことになる。

Lang 以前にもこの物語が夢であることを指摘した者もいれば、Lang 以後にもこの物語は現実を描いたものだと主張する研究者も多い。つまりこの作

品は、現代においてもまったく対照的な解釈を可能にする不思議な物語なのだ。まさに Colacurcio の言う "ambiguous" で "inexplicable" な作品なのだ。

外国語として英語を学んだ我々日本人の多くは、文法的にこの "she" が、二人の女性のうちどちらを指すのがより自然なのかという疑問を抱くこともあろう。しかし英語をネイティヴ・ランゲッジとする文学研究の専門家たちが、意見を真っ二つにしているということは、もはや文法という次元を越えて、テキスト全体から Hawthorne の真意にせまっていくしかないと思われる。

そこで最後に目覚めた "she" を Mary と取る解釈をドリーム説、Margaret と取る説を現実説と呼びながら、作品の見当に入ろう。まず第 1 パラグラフの冒頭に注目してみる。

> The following story, the simple and domestic incidents of which may be deemed scarcely worth relating, after such lapse of time, awakened some degree of interest, a hundred years ago, in a principal seaport of the Bay Province. (192)

ここには明らかに語り手がいる。恐らくは作者 Hawthorne であろうが、語り手が 100 年前の出来事を、第三者の立場で語るこのパラグラフを、Mary の夢に含めることは当然ながら不可能なことだから、ドリーム説を採る場合には、この作品のどの時点から Mary の夢が始まったのかという問題が生じるのだが、これが案外複雑な問題になるのだ。というのも Colacurio は "a dream, a dream within a dream"(4) という言い方をしているのに対して、Neal Frank Doubleday には "a dream — or, apparently, a pair of dreams"(5) という表現が見られる。つまりこの作品で描かれている夢は一つとは限らないということだ。その点に注意しながら作品を読み進めてみることにしょう。

二人がそれぞれの寝室に引き取るのは、第 5 パラグラフの前から 3 分の 1 ほどのところである。その後に次のような文章が続く。

> Sleep did not steal upon the sisters at once and the same time. Mary experienced the effect often consequent upon grief quietly borne, and soon sunk into temporary

forgetfulness; while Margaret became more disturbed and feverish, in proportion as the night advanced with its deepest and stillest hours. (194)

ここで明らかにMaryは眠りに落ちた。もしドリーム説、それも夢は一つであるという前提に立つなら、この後どの時点からがMaryの夢の内容になるのかということが次の問題になる。もちろん現実説を採るなら、残り一切も作者あるいは語り手による客観的描写ということになる。ここで最初の障害となるのが、Colacurcioが言うような、"there simply is no plausible point of transition from one dreaming consciousness to the other"(6)という意見である。しかしこの意見には目をつぶることにしよう。"point of transition"がはっきりしていれば、それ自体がドリーム説の証拠となり、そもそも現実説などは最初から存在していなかったはずなのだ。また曖昧性を特徴とするHawthorneのような作家に、明確な"point of transition"を求めること自体が、あまり意味のないことのように思える。この作品を検証するためには、Hawthorneの曖昧性の壁を突き破って、"plausible point of transition"を発見することがその第一歩となるだろう。

そこでMaryの夢についてだが、一つの可能性として、上に第5パラグラフから引用した文章の真ん中、"while Margaret"以下、最後のセンテンスの"and she suddenly awoke"の直前までのすべてがMaryの夢であると考えることができる。この場合は、Margaretの夫の生存の知らせもMaryの夢に含まれ、兄弟は二人とも死んだままということになる。

もう一つの可能性として考えられるのは、Margaretが夫の生存の知らせに安心して眠りについたあと、"When the night …."で始まるパラグラフ以降をMaryの夢とすることである。この場合、Margaretの夫は生存していて、Maryの夫のみ死亡しているということになるが、これを不均衡と取るかどうかは読む側の判断であろう。

そこで以上二つの可能性を、仮に両者死亡説と一者死亡説と呼んでおこう。ではこの二つの説のうち、より自然なのはどちらかといえば、それは明らかに後者である。Margaretの夫の生存がMaryの夢の中に含まれていたとすれば、その夢を見ていたMaryは当然そのことを知っているはずであり、喜び

を分かち合おうとためらうことなく Margaret を起こそうとしたはずなのだ。また Colacurcio が指摘した "plausible point of transition" についても、Colacurcio には "plausible" とは思えないにしても、"When the night was far advanced, Mary awoke with a sudden start"（196）というパラグラフ冒頭の表現は、一種の "point of transition" であると強弁することは決して不可能ではない。この場合面白いことに、"Mary awoke with a sudden start"（196）したときに Mary の夢が始まり、物語の結末で "and she suddenly awoke"（199）したときに実際に夢から覚めるという構図が成り立つ。

ここまで書くと両者死亡説を失格とする可能性がかなり高くなってきたようだが、この説を弁護することはまだ可能だ。Mary が夢の中で目覚めるとき、"A vivid dream had latterly involved her in its unreal life, of which, however, she could only remember that it had been broken in upon at the most interesting point"（196-197）とある。つまり Mary は夢の中で見た夢をほとんど覚えていないのだ。Margaret とその夫の生存に関する夢、それが "a dream within a dream" なのだが、その内容を忘れたまま夢を見続けていたという可能性は否定しきれないのだ。すなわち Margaret の夫の生存の知らせの部分も Mary の夢に含まれているのだが、Mary はその内容は忘れている。ただその夢の内容については、第三者である語り手が読者に語り聞かせることによって、読者だけが知っていることになる、これがこの物語の構成というわけである。これも一つの解釈であろう。

さて物語の後半から始まる Mary の単一の夢という考え方、つまり一者死亡説がやや有力ではあるが、両者死亡説すなわち "a dream within a dream" 説もまだ捨てがたいことが分かった。またこの他にも、"a pair of dreams" という解釈があることはすでに紹介したとおりだ。それはもちろん夢を見ていたのは Mary だけではなく、Margaret もまた夢を見ていたというものだが、この説の妥当性はどうだろうか。

Margaret は自分の夫の生存の知らせの夢を見て、Mary は Mary で自分の夫の生存の知らせを夢見る。非常に対称的で構成的にも面白い読み方だ。物語は現実の描写から始まり、Margaret の夢、Mary の夢へと続く。夢が願望の充足を求める表現とすればこの説もまた大いに有力であろう。

またこの物語の主人公は人格的により成熟しているMaryであることは明白であるから、Margaretの夢の後にMaryの夢が来て、Maryが目覚める場面で物語が終わることにも不自然さはない。むしろ問題は、先に引用したようにMaryの方が先に寝付いてしまったことがはっきりと地の文に表現されていることだ。この表現に“sunk into temporary forgetfulness; while Margaret...”(194)とあるが、“forgetfulness”のあとがセミコロンではなく、ピリオドで終わり、“while Margaret”以下が独立した文章になっているのなら、Maryが眠り込んだかどうかに関わりなく、Margaretも寝付いて夢を見ているのだと考えやすい。しかしMaryが寝入った後のセミコロン以下は、もしこの部分が現実ではなく夢であるとするならば、自然な流れとしてどうしてもMaryの夢に含まれてしまうように思える。繰り返すが、Maryが寝入った後のセミコロン以下が、別人であるMargaretの夢であるというのは、文法的にどうも無理なような気がするのだがどうだろうか。

ここまで見るかぎり、3種類のドリーム説には多少の難点はあるにしても、どれも決定的に否定すべき明白な根拠はなさそうである。三つの説のうち、どれか一つに軍配を上げることは出来なくとも、ドリーム説自体を否定する根拠はない、と言ってよさそうである。では最も賛同者の多い現実説はどうであろうか。

まず現実説の否定的側面について述べる。それはLangが指摘しているように、“if we read the story on the realistic level, it is somewhat improbable (two simultaneous resurrections after two simultaneous deaths)”(7)ということになる。Hawthorneの時代よりも100年も昔、フロンティアも海の航海も危険に満ちていた頃であれば、兄弟がそろって死ぬということも決して珍しいことではなかったであろう。しかし同じ紛争や同じ災難に兄弟が巻き込まれたというならともかく、まったく別の場所でほとんど同じ時期に死亡し、ほとんど同じ頃に死の知らせが届き（知らせが届いたのは“two successive days”とはっきりしているが、死亡したのがいつかは明示されていない）、そして同じ夜中にその知らせがどちらも誤りであったということが伝わってくるというのは確率的に見てどう考えても不自然である。あまりに出来すぎている。あまりに作り物的なのだ。これが現実の出来事として描かれているのならば、この作品は不自

然な状況設定のもとで、単に義理の姉妹の思いやりを描き、中途半端な結末を持つだけの駄作になってしまう。

処女作 *Fanshawe*（1828）を自費出版しながら、満足できないがために回収してしまったという、自分の作品に対してストイックなほどに厳格な作家 Hawthorne が、実際にこの作品を発表し、しかも第 3 短編集 *The Snow-Image*（1852）に再録したほどのこの作品がそのような駄作なのだろうか。Hawthorne はそのような作品の再録を許すような作家であったろうか。これが筆者の現実説に対する疑問である。

次に現実説の観点から作品そのものを見てみよう。この作品には夢を暗示すると思われる場面が二箇所ある。二人の夫の生存を伝える伝言者が、それぞれ夜の町並みに消えていく場面である。Mary への伝言者、昔の求婚者である Stephen が立ち去る場面だけでも引用しておこう。

> He hurried away, while Mary watched him with a doubt of waking reality, that seemed stronger or weaker as he alternately entered the shade of the houses, or emerged into the broad streaks of moonlight. (197)

ここにははっきりと Mary が "a doubt of waking reality" を抱いていたことが書かれている。月の光の中で見え隠れする Stephen の姿はそれほど幻想的に見えたのであろう。しかし 1700 年代前半の電気もない時代に、月明かりだけの光景が幻想的に見えたとしても、それを登場人物の主観として考えれば、それが夢であることの何らの証拠にもならない。作者は単に Mary が感じたことを、事実として客観的に描写しただけに過ぎないとも言えるのだ。つまり幻想的な描写も、ただそれだけでは夢の証拠にはならないということだ。

それに対して作者は、この物語が現実であることを示唆するような文章を、かなり明瞭に作品の中に残している。一箇所は Mary がノック音にひかれて窓辺に寄って窓を開けようとした瞬間。"By some accident, it had been left unhasped, and yielded easily to her hand."（197）ここで "by some accident" と言っていることは、Mary の頭の中には留め金を掛けたか、掛け忘れたかとい

う意識があることを暗示している。

もう一箇所はMaryが自分の吉報を知らせようとMargaretの部屋のドアを開けたときだ。“She opened the chamber-door, which had been closed in the course of the night, though not latched,”（198）とあるが二人が寝室に引き取ったときには寝室のドアはどちらも開かれていたことは、“The doors of both chambers were left open, so that a part of the interior of each, and the beds, with their unclosed curtains, were reciprocally visible”（194）とはっきりと描写されている。では誰が窓の留め金を外し、開いていたドアを閉めたかと言えば、それはこの家のもう一人の住人Margaretしかいない。つまりMargaretが宿屋の主人のノックに応えて、窓を開け、いったんはMaryを起こそうとしながらも自分の部屋に戻っていったときだ。

Maryが眠っているあいだにこの細かい変化が生じ、Maryもその変化に気付いているらしいということは、そしてその変化に合理的な理由、つまりMargaretが夜中に起きだして窓を開け、また部屋に戻ってドアを閉めるという合理的な理由があるならば、この二箇所の描写は、現実説を補強する有力な証拠となるであろう。

では合理的な理由はあるのか。実はあると言えばあるし、ないと言えばないというのが本当のところだ。Margaretの夫について知らせに来てくれた宿屋の主人Goodman Parker、彼がドアをノックする音こそがMargaretの行動の合理的な理由と断定してしまってかまわないようにも思える。しかし彼もまたMaryの夢（a dream within a dreamの場合）、あるいはMargaretの夢（a pair of dreamsの場合）の中の登場人物であることは、いまだ否定しきれていないのだ。

そもそも夫の生存を伝えに来た二人は、どちらも月明かりの中、幻想的な雰囲気で描写されている。Maryへの伝言者Stephenなどは、“wet as if he had come out of the depth of the sea”といったずぶ濡れの状態で描かれている。まるで海で死んだ夫の代理人のような姿で。夫が亡くなった後、昔の求婚者が夫の代理を務めて未亡人を慰めるというシチュエーションは十分想定可能な範囲であろう。彼はMaryの夢の中では夫を補完する存在なのだ。つまりこの部分は、しばらく前まで雨が降っていたことを示す水溜りがなければ、そ

れだけで現実説を破綻させてしまいそうな描写なのだ。

Margaretへの知らせが現実のものであるとはっきりしないかぎり、窓の留め金も寝室のドアも、現実説の補強には不十分なのだ。そもそもこの部分が夢ではなく現実であったとしても、Margaretが留め金を外したことも、寝室のドアを閉めたこともテキストの中には一言も語られてはいない。ただ前後の状況から、MargaretがGoodman Parkerのノックに応えたのが現実ならば、Margaretにはそのような行動を取るチャンスがあったという状況証拠があるだけなのだ。ではなぜHawthorneは、夢とも現実とも取れるような思わせぶりな表現をあちこちに書き記しておいたのだろうか。

夢とも現実とも取れる表現、筆者はこれこそHawthorneが目指していたものではないかと思う。少なくともHawthorneは、夢としての解釈が可能なように意図的な工夫を施していたことは間違いないと考えている。なぜならすでに述べたように、この作品が単なる事実の描写ならば、作品冒頭で語り手が述べているように、それこそ“scarcely worth relating”な駄作になってしまうからだ。

駄作に堕してしまうにしても、確かにこの作品が現実を描写しているという判断はテキストそのものからは最も自然なものであろう。しかしちょっと頭を捻ってみれば、ドリーム説による三つの読み方もまた可能なのである。そしてこの四つの読み方のうちどれが正しいかという決定的な証拠は残念ながら筆者の読解能力では見つけることが出来なかった。しかし筆者は決定的な証拠がないこと自体がHawthorneの曖昧性そのものであり、決定的な証拠を見つけられなかったこと自体が、Hawthorneの読み方としては正解だと信じている。

ドリーム説を否定しようとして、Doubledayは“The objection to this reading (reading the tale as a dream) is that we should have to assume an entirely dishonest narrator...”[8]と言っているが、曖昧性の作家Hawthorneの読者は、むしろ“dishonest narrator”の存在を前提としながら、慎重に彼の作品と接すべきではないのだろうか。

Hawthorneの代表作の一つ、*The Blithedale Romance*（1852）の語り手であるCoverdaleなどはa dishonest narratorの典型的なものだろう。作者の死後100

年以上も経って、主要登場人物である Zenobia 自殺説を疑問視する声があがり始め、ついには語り手 Coverdale こそ、Zenobia 殺害の真犯人だという説があちこちから湧き上がってきた。もちろん Coverdale 犯人説を無視する研究者も多いが、賛同する者がいることもまた事実なのだ。語り手 Coverdale は信用できないと。これは何を物語っているのだろう[(9)]。

作者 Hawthorne が意図的に多様な読み方をその作品の中に封じ込めておいたと考えることは出来ないだろうか。多様な解釈を可能にする創作作法、それが緻密な作風を持つ Hawthorne を曖昧性の作家に仕立て上げているものではないだろうか。

"The Wives of the Dead" が、Hawthorne の作品の中でも最も顕著な a dishonest narrator である Coverdale を主人公とする *The Blithedale Romance* と同じ年に刊行された第 3 短編集に再録されたことは暗示的である。この二つはどちらも緻密な作風と解釈の曖昧性を併せ持っているのだ。

緻密さと曖昧性、この二つはまったく相反するもののようなイメージがあるが、Hawthorne の曖昧性は緻密な計算のもとに生み出された Hawthorne 独特の曖昧性なのだ。緻密な計算がなされているがゆえに、そこには当然ながら帰結すべき答がある。論理的に考えていけば、"The Wives of the Dead" は Mary の夢だという結論に導かれる。あるいは Mary と Margaret の二人の夢だという結論になるかもしれない。夢などどこにもないという論理的な結論もありうるであろう。つまりどれもが正解であり、どれもが間違いなのだ。Hawthorne の読者は、計算しつくされた曖昧性の中でまるで踊らされているようなものなのだ。一つの結論で満足してしまうとき、読者は Hawthorne の術中にはまる。Hawthorne は読者に多様な読み方を提示して、その迷路をさまよい歩く愚かな読者を墓の下から笑っているのかもしれない。

(1) H. J. Lang, "How Ambiguous Is Hawthorne?" (1962), rpt. in *Hawthorne: A Collection of Critical Essays*, Ed. A. N. Kaul. Englewood Cliffs, 1966, pp. 86-98.

(2) Michael J. Colacurcio, *The Province of Piety: Moral History in Hawthorne's Early Tales*, Harvard, 1984, p. 100.

(3) Nathaniel Hawthorne, *The Snow-Image And Uncollected Tales*, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, Volume XI. Ohio State, 1974, p. 199. 以下 "The Wives of the Dead" からの引用はこの版により、本文中にページ数のみ記す。

(4) *The Province of Piety*. p.103.

(5) Neal Frank Doubleday, *Hawthorne's Early Tales: A Critical Study*. Duke, 1972, p. 217, fn.

(6) *The Province of Piety*. p. 555.

(7) "How Ambiguous Is Hawthorne?", p. 88.

(8) Hawthorne' Early Tales, p.217, fn.

(9) *The Blithedale Romance* の曖昧性については拙論「*The Blithedale Romance* 研究」『教養論叢』慶應義塾大学法学研究会、101、102 号参照。